善知安方忠義傳 二編 貳

へ13
1305
10

1305
10

善知安方忠義傳第二輯巻之二

東都　松亭金水編次

第三回

鵰を射て重太郎禍を釀す
走卒を招て高資知縣へ赴く

粤ふ重太郎以下の三個い雖るく狼を退治して禁る村長が宅ふて獵夫等るふ。こちらもまた夜を徹て家ふ飯を。父ふ如此このよを語り。あのく渾身も労まさまたび其侭歇うるる。耳の湯で嘗ゝこいの賀ゆけ紀あぐり。こんまたび父い表ふ在て。柿糸柱い庖ふ在て。朝餉の准仗をるゝて。ゆ。ゆて村長と獵夫等い知縣を狹し罵て。帰てあけが高資い要時ありて此方へ来るふ。えや彼三個も紀出さまたび。昨夜の功を労ひ。囲爐裏ふ懸る罐子より自ら茶を汲て進め。お身達今ゆまゝふや。知縣の計らひ

悪しとて人に大小憤に居まり。凡そ人の上ふさりの。卵も乳をふてい。ヨヌくの人を治めぐ〜。知県荒磯ぐ如きさび酷吏と号て虎狼う。猶怖ちくその害深し。這回の一挙重太い固より。お才達もその賞を貪らんとそのヨヌあ〜ねど。容易人民の害を除くい大るる功るるさ。腹黒くもこまを賞せび。まこと狗九郎ぐ雑言吐て吾を釣んとちるい涼き侠細のあるるとを慮せび〜て五こぐ。ひふ怒を含むとこるい其虚ふ素ぐて波輩ぐ忍み壺ふ陥ふべし。假令この上狗九郎等或ひい非礼の挙動を做し。ちさいを換え品を変え唆うびともよく恐びて。漫ふをる動うそ。と深く重太郎を誡めて。好て院の伐衆戸より。二口の剱をとり出。こい在下世ふあるとを素めて秘義ちさうしぐ。浪くの才の詮方るく。脱ふ責排ひて父子ぐ命の代ふるさと学ひ〜とり。その村長の情ふ従りて。竟ふ衣食の便を汚さまこび。その侠ふ秘ちさうり別足

と両個へ進らと。元来在下の持料ふて。よ記物ふいあ〜ざまど。ヨヌぐ門人爰記ぐ中ふ後来重太郎の佐とも。ヨヌべきめい足下等ふ。他ふいるとと稼て必へべ。いさう好云と表ちるのこ。こい全く這回の賞ゑンどくふいあ〜び今まで。ようこおもるく。その侠ふさ〜くるぐ不為必ひ出るまく持出さうとらひけまび里見金井の両人いるひもうけぬこの賜ふ。互ふ眼と眼と足あいせて。秘ふい兎角もいえざう〜ぐ。良あつて里見金井。額着ていひ歩ふう。吾仁させる功もるく日来大恩を稟ヨヌ〜。十分ぐ一ざも報ふとるく。平生ふ先生ぐ厄仗ふのこ。ヨる者を以て爭ふいかる賜りのと受ささや。鵠恩の辱きい骨ふ搗肝ふ銘ぐて生〜世〜忘れ申〜び。拯ヨヌ〜この佩刀いまづ納めるこの人べ。折もあ〜び其附こそ湯ふ〜めとにと拵へ。額着ヨヌ〜ふ。戻せび。高資いうち笑こそその辞退いさるヨるの〜。畢竟常言ふいふ君とふいふ者とそよの仁理あて。在下今い年老て。ちや茅干の限

命もるゝ。翌ふもわまを不虞。このあゝぶ悔しとも甲斐なし。李札が劔の例もあまべ。
何とるうゝ急まぬ。左右るくとまをべ約ゆへさて重太郎ハ年ふ似ぜ形こそを
大さはまを不謂大童子るるのふていまぐ物の要ふさぞ在下げゆと離まてい学ふ
五三の兄束るゝ。特むい足下笘両個のこまさ糸柱も年見らぬ處女るれども女の身
い不便を加ふる人もありて。結勺仏易さことあり。かくいそぐ事毎ふ遺言めさて忌ゝれ
どもるゆ六十ふも解まるのい死の兄ねこそ肝要とゆへべこまと告ちくるれと重
太郎をえ久まて。汝母こまるる両個をべ兄とゆひて疎畧るく僅のこも商
譚てよく絆を計らふべ。努ゝ差ふとるれと説示せべ重太郎ハ畏まうぬと
回答てまを両個ふうち對ひ父ぶかくまでの程云るるとゆい却てゆ
いざゝく佩刀を禀納めゆひ祐と但さまて。両個い却て紹ふ。佩刀を把てゆ裁
さそ。その恩をぞ謝ふける。徳而九郎高資ハ三人ふうち對ひ吾日来らうそひ

るの時あつて果ゝぬるも。まづ生前の安堵くるるふ重太郎いとの歳十六形
さえも大たけまべ。総角あそおえんも似げる。今日ハ幸ひ吉日るるふ。元服さて
大人ふるるさえ。搢紳の元服ふハ。加冠理髪さるくの式法あまを在ハ甲斐るる。
葬の宿ハ如仍ふもありるん里見ハ加冠金井ハ理髪。ものくその美仰とるゝ。
と称て糸柱ふハひつけて。銚子ち笑るど把出させ。仏ぶりの式作法額髪ふ角を
いま今日ゆり西條重太郎高純とぞ名糸せけ。夫ようゝ僅の膳部を設け。式
邑の長を始め。第るのうち程をるを拉さ集めて酒飯をるまひいと振い
ちくぞ祝ゝけ。かくて月日のるを易くその年も暮て次の年。素泳はこの比
とるるりぬ。このわど日和も和羅ふて。四方ふさるゝ引雲ハの糸ハ山路の衣織
んとてさ洗ぐくのを糸を引るのすると結ゆハ百千鳥ハ枝ふ囀まて。その糸
を遠るふ似さう。さハま山家の僻るまべ。いまぐ桜ハ咲出べ。梅の白さハ

を萎まして行るゝに生い盛の色を見せて野辺のさまいと奥あまたび重太郎いと盛あまりひて色どゝ彩めて春の野に養る雉子を狩んとて弓矢携えて出ゝ。乃ち程なく荷助に会ひ。そのことを物語ふに夫こそいと奥あるべし。とうち連ごちて山へいくゝ。此方彼方さうち瞻望名月の名人なゝ。此処彼のさまと三十一文字に綴りて奥と信ぜさふ鄙育の吾们に風雅なる術とゝまで。動きまたび川狩山狩武を腕押辻角能で荒くまてる業をのこと朝夕なの奥とする。随一きりの限りとなるゝと歎息まるを荷助に曰て宜ひそ見ハこそ武門に生れ一勇少て詩文管弦をもて不化とまてる青侍とゝ斉しゝ。今ふもあまき朝敵などのもとて伝ゝがさる舟に乗くも一天の君より吾等を召るゝ則特と名のふあゝまでやかの文よと詩作る人箇様の節の要あいまゝ。されば武士わど世間に当るぶべきものいるゝと軈然とうち笑へば重太郎もまさうち笑ひて。俎より下をえあらせば非をの若竹ふとまぐ紅妻や為らんわろ内。雉子の声の吹由まびこるのさを祝久ア金井性蘇ふ雉子の声てゝり。往て二三羽射留るゝんとい不荷助曰夫こそよけま一大来くと落と索め捜て蘇くありゝて雉子をあさり手処彼処限ア也もゝぬ草壮ふ之躊躇ア在けるゝ。暴ふ山上より大風の吹頻るゝ如き音をまび二個い落る作向ふ。その音何とも分がさこぶ。ごがさゝと鳴をめくこい何るんとうちふさ。も和暖ふ一点の雲ごふるゝ。大虚の忽地黒雲さち覆ひ宛然暗夜に異るゝ。偖ふ咫尺の間もえ弦ぶ。ア得剛気の重太郎も荷助も俱ふ駭き呆まこい什麼いふせるぞさと雨雲あり重るとも斯まで暗さるやいある。此処彼ふいるゝるゝ。彼天狗とやんいふりの。不為るもゝべゝび弓箭い武器の

守るの悪魔降伏の物とて。僥倖其処に持る人に空に向ひて放ちる。
と荷助らの人に実に示るゝと重太郎に弓に矢番ひさうくと言絞て大
虚へ切て放つに。その矢に少しも荅へあり。ぬにをまと点ぜてまた矢さうち
番ひ満月のごく言絞て。暫し猶豫て切て放つに。元来暗夜に異る〻後に
その徒さに知るよりる。兎角さるうちまさがさくと譬ばこち近さる竹
藪と粒多の人して震ふゞ如き音のあるけるが狂もあゝせば傍より晃と。
日の光を彰き出。黒雲のごきの生帆うちうけ一杯より早く小の方へ翔
陸と見えしが。樹〻の梢に隅らき忽地に見えぬるて。元の晴天となりぬ。
両個に互に顔見あわせて。人もあはぬ山中あり。種この怪異ありと。物のか
ふも記しるゞこの平生来る山路ゆてかるるゆゝ迷ざも及ぬ広ようやく
語るとも。実とさるくあるべゝ。実に奇異るるゆぞう。尚に足下ゞ

羽に任せ大虚へ矢を射しとき甲の矢に行とるく。物に中まる処地せり。その
矢に当るゆゆ。倘や天狗の所為るゝん。必一矢に当るゆゝと吟て
荷助に呼ゝ。ふそに宮此方の山のこ中るとにあるべゝ。渠に神通自
在にて。伯耆の大山加賀の白山。また下総の二荒山上野の義揉各の山武
ひに陸奥の金花山京洛で愛宕鞍馬山。紀の玉高野甲斐の延名さる勝
地名山を。さて一日に巡りすとに怖しきものるを。年九丈の矢に中らん
若徒らんにこの奇怪なるく天狗ゆそにあゝ。その鬼もあまこの聖迹
に。誉に維るを射て慰まん。と名ひるめで防らま。雖みも何地へ飛去
るゝ。今ゆ亟に飯するん。和るいゝに名もやとに重太郎も点ぜて在
下も徒こそに名人を退らんとうち連ざち。家路をさして飯田へり。富下西條
高資に門多に出て四方八方を瞻望ゆて在けるが。両個が飯田に帰を待て。莞

示やうふうち笑こゝ。金井姓も俱ふ従ーう。今日ハ不思の怪異ありて。獲物も大きゝるうつくんと。皮て両個ハ怪こゝつふ。てその怪異を居ゐ〳〵ふ初りゐふやと。詞を持へて評を問へバ高資ハ点頭て。ゐ刃達ハ山路ぢうのゐとゐふも。会理ゐゝ。ぢよりや彭祖ゲ八百歳の寿ハ保つとも。まこと遭ゝこと未ゐみの珍ゐさぞ你達も驚きつくんとゐふ荷助ハ進こうゝ。今飯ゐ路ぢゝも天物ゐゝの不ゐゐゐべ。と大方ふ推量せゝゲ。先生ハ家ふ在ーて。初つゐふゐの異こ評ー倘まこと此処笑ふ涉まぞも。その怪異のありぬるやと。徒ーきこえバ高資ゲ九日ゆの廣ーとハど。恐らく漏洩ゐ糸あゝド。さゐ所ふこそ見くハ雪よりも猶時ゐうーこハゐゐくふ凡意ゐさて。測ー知るべきふハあゝ弦ど吾ハその縁所をいさう考へゐこゐとあり。慰ゐゲゝ語るべ。此方へ来よと先ふさち。家ふ迎入まゲ両人も続て家ふ入こゐる。當下糸杜もこち出て。驚きこゐよゐゐど徒ふ語りゐひ荷

助ハ車夫ゲ虚空ふ向ひ。矢を放せーゐゐこゐ物倩てあるわどふ頼て高資ハこゐ〳〵ゐゐ。そもゝ今日の怪異とハハ限ーもあゝゐ大ゐの空を形ゐふふ飛ひゐ。その翅の霞ふこゐ日の光ーを遮ぎう止めて。晴夜ふ孝しくゐうけれど。翅退くふ陸ひて。時天ゐうゐ元のやー。更ふと見ー天ゐゐゐゲ。況ゐ天物ゐゐゐ所為ゐゐゲ。ゐゐゐゐ紙ふとゐをいそ。北溟ふ大魚ゐり。その名を鯤とハふ大さ嵩ふ雲ゐゐゐを起ーて。その名を鵬とハふ翅ゐ翼ゐ千里ゐり怒て飛ゐ。更ふ蛮夷の雲ゐゐ。ゐこハ荘ゐの説ゐゐ。さハゐ荘ゐハ寓言ゐり。信用せゐる人もあゐ。ゐゐ皮ふ瑯琊代醉ふ。鯤ハ実ふ在ーし。我らゐ孔氏志ふ楚の文王古今無類の鷹を得ゐふ虚空ふ物あーて形をまゐゲ抜ふかの鷹ゐ飛陸ゐ。須臾あゐて羽の墮ゐて死ゐ雲の降ゐ血の灑ゐこ雨のやー。且くあーて天鳥地ふ墮て死ゐりけり。その両の翅を度ゐふ廣さ

数十里あり〜とのべたるまでも見ばとのあるるまでを初出るの。こゝに博雅の説に
あるまでこゝまで脇の雛ありとのべたり。新編庭訓の脇ある仏説ふかく金翅鳥とのべ
たるの翅ありたるを根あるとそのたるの翅ありたるを根あるとの三百三十六万里
の海ふかく海竜王を捉へ岡陵掲ゆ止一足の内ふ容ると競まてうまく長阿含経の文ふいちく金翅鳥
海中ふ飛ひて翅を収て水を搏ば水ふ両ふ開くその深さ二百由
旬卵生の竜を取て食ふ胎生の竜を取て食ふ湿生の竜を取て食ふ化生の竜を取て食ふ楼羅とのべたるそ
ふ略とのべたるに小金翅鳥のあるるんに拠まべこのあるる翅を振て虚空を翔て
ゆくとのべ。霊鷲の新忽地ふ暗夜とのべたるも拠べ。尚ふまと忽地ふ暗夜
とを怪くやひ庭へまいるを空をかけるふ。ほど翅を広へ計りのあるえ
う。この新て信者ふの腰競とまるとのべ。特徴人いたるとのべ。天堂の
慶大の極とのべたるとのべ。書籍を引て文を引て律詳ふ説けまを分重太郎

を指さ。荷助も俱ふ驚き歎〜屡高資が強記を称〜ぬ。かゝる折〜も外の
方暴ふ強き。そまを退ひ岡よ遁さるゝと異口同音ふ罵ア速て人数を
あも裏こと。弦ゆく音の吹ゆまべ何ゆあやと重太郎荷助も俱ふ立ち
出ゆまべ。夜詣ゆる人るゆ。今ゆも一人の賊馬を窃こ彼人の人彼
赤ふの樹蔭を東へ逃ゆくゆ。追岡んとてもゆゆくふ注べ行ゆど間隔
アもちやく恢ひ雑うんと首を書き息を切らしてこゝ彼方を祝ゆのこ。
重太郎ハ吹も敢ゆ他ゆるゆば兄非もゆるゆこゆ住郷ふ他ゆる族を追
岡ゆ孤厚ゆるゆん。谷ハ跡ゆり来ゆ。ゆ逐岡て取戻さんとのひも
敢ゆ尻引かゝげ。花ゆやくふ走ゆ。荷助も跡ゆり後まゆと息を
切て弛ゆるゆど。郷人もゆゆふ撥ゆ沿ていざ諸共ふと近ゆまゆど賊ゆやゆ
三四町往ゆるゆるゆゆ騒ふうちゆ跨ゆり。諸拍いまて飛ゆやく。散ふ

弛ゆけば。緩金神行戴宋が。四ッの甲馬を懸て逐てくとも。及びがたくぞうえ
うりける。折ふし高資糸桂も。門多ふ出てそまこさて。嗟勇まとしのの
ろ。糸桂い父ふ對ひ。兎角重太い血気ふ捷ア人も特まぬ腕ざそいら
ざるとふ仕ゝぢや。倘もかの紙ず弓ゐのの。浮物を持て居さうんふいそひ
掛ざる過あるべ。独いるくともこの盈るふ人の馬を竊てふ大膽ゐる曲ゐる
まべ。彼方も覚えのあるのゐるべよや首尾よく逐ゐとも。この遥の路を
弛て息も切まこ気力も痩まゐど曲ゐふ敬ちべさうぐ家のゐを取まゐび。
世間へ受え恥辱とゐふゐいも仕るまーかく言さい鳥滸ゐのまど飯ア来べ
後のこを能こ誡めゆゝうと眉ど顰てうさに説も同胞を哀しむ心の実と高
資い怠ひて理ゐりよく該ちべしと回答ゐ。狂その影を目送傍ふ足を早め
て来る人あり。誰そとうまべ知縣ゞ家の。眼印つけゐ走卒高資ふ令粋

ゐてこまべい知縣荒磯主の走卒ふいるぐ。唯今知縣先生ふ面談ていべさゐ
あり。家笛と倶ふ訪来ゆくとの。仰ゆていゐりと額の汗を拭ひもあくぞ演れば
高資こまをさて。何ゆの急用ゆて。ゐ倉卒在下を召呼せゐふゆや。追付糸
上すべけまべ。そのよ報命まうさせゐくとのひゝ徨べそちのまべ。糸桂も倶ふ
いり。昆まで長き年月ふ知縣よりの走卒ゞ走さゐ爹々を平ふ来。るいさゝく
覚えねふ今日ふ限ゆまていゐるのこゆや。此方ふ心着るくとも。若まゞ重太ゞ
かの人こふ。不礼とゐ申ゝこゆて。丈夫といて咎めんこゆふ爹こを呼ふゆゐ
ざる礼。乳遣ゝやと眉うち顰め。按ゐ女児の顔を視て。呵ゝとうち笑ひ。ゐこ
ふゐ物ておりひそ。よゝや然る條ふもゆまこ陪話ゐべそまこですむゆるんを考
郷人ゞゆまくこいて言放ゐすふより。頑ゐる僻とて傍痛くゐふう。独まべ
もゐ紀と作山ふ威ど示さんとするゐべ。遅ゐさべこまゆまこ辞の粮ふ入ぬべ

去来徒べ〜と糸桂を急げ〜えて衣とり出させ。暴ふ衣服を改めて。知縣の莊
到りけり

第四回

勇を奮ふ重太郎馬賊と戰ふ
知縣の奸謀英雄狡猾

こゝふ西條重太郎ハ阿修羅王の荒るゝごとく。まさ韋駄天の走るが如く。
右の鬢の毛逆〜まふさち。大地を荒ららふ蹈るゝ〜て。三四町後まとる走る
ふ蹈るゝ色をづき。大音ふ呼ゝる。你何方の白痴ふて白晝ふてゝ来る。
馬を竊こて去らんとする。大膽なる擔板漢。馬をうとゝふ逃せ給〜ぐて
汝ぐ二つる兄首引抜んと罵ゝる〜〜。乞ゆく馬の尾を絡こ力任せふ曳戻
馬ハ四足をえるゝて。こぢ〜〜と三足三足逃巡ばかの賊ハ物をもいそび閉り
抜ゝり。此処若洲の農夫ハ。ゆ〜〜ふ汝ぐ挙動対分ふるりて泡さと

けれどうまこび北策ふも見らぬふ和尚ハ力の清と做さんも便る。志の気健さふ命
い助てゆるさせんぞと喝ると咲あ〜ぐ〜ぐ。方図もる兄雑言
るゝかくハ我を誰とゝ思ハ。潮平ふ陽まる兄西條重太郎高純るり。天狗童
ゝと綽號され。この近国ふ名ぐ及びてあるる。汝もこぶ英名さび及びてあるる
らんと大音ふ呼ハまこび。ふも天狗童のとゝふ小冷利和尚ありと人の
ハこび咲ゝるゝあり。夫ハ天狗ふまれ蛇ふまきこぶ尤腕
ふも見りのゝ〜ぞ。可惜命を亡さんより。頓く飯まとまさ再び喝ら立て手を和尚
い奮然と大ふ怒り。詞戦ひ会盃ゝ血ゝ〜ぐ〜ぐ。愿ひふ任せ死出
のこ旅させこゝんと蒐よつてかの痣九の太刀引ぬき。兜甲ふさ〜斃して切てか
まこび彼賊も。腰ふ帯ゝる一刀をぬ〜〜と抜てさちむ〜ひ〜〜〜殺矢と一上一下法を素
さび挑ゝあ。互ふ劣らぬ術と見えて。猶を拂へび通を越え宙を撃び刃を流め

左りへ避り右へ突き進で撃ば身をかはし。虎乱青眼波の月。飛鳥の翔り蜻
蛉の此処彼処と飛まはれば彼処に頭を剃を削り火を散らし。五十余合の奮撃
突戦。いまだ雌雄も分されざりしが。荷助は遥にこれを視て。鏖破一大事と気
を焦燥。自ら心を励まして漸くに走よりつゝ。自ら大切して吾是るぞ。平浪伏
すべき心地はなさねども。かく女と数ては後とまで人の笑ひの種なるらんと。倭僂足
と踊あがり踊あがり。両個が傍へたちよりて。吾子よ気張らるとひいて金井荷助これ
に在り。いざ助太刀して参らせんといひつゝ腰より引抜くは三尺斗りの氷の刃。両
個が合せ切先の。其中へ丁と突出し。右と撓ひ左りを打。挑み戦ふ勢ひは長
途に労れしものならず。日来手練の剣法奈まぞ。その間に人々もおのおのに
走り去づき式ひは鍬鎌棒竹槍。おのおのに引提る。得物を持て盗賊が前
後右をおつとり携。多勢を膂力に恃みて敦圍ておしかゝる。賊はふさぎて猶し

といへども彼大勢に撃立られ。及び難くや思ひけん透を見あはせ取携る。
農人們を伐払ひ跡膳まで逃てゆくを重太郎は猶遁さじと跳まはり追
つて追出さんとせしを荷助は急ぎおし止め。馬は難なく取戻しつ。逃るならば逃
しおへ。跡追ひ遁て何かはせん。思ふに遠くは賊なるべし。侮まじく壮夫なり方に
一つも過あやまてば膝を噬ともその甲斐なし。止まりたまへと制しまして怒りを
鎮めつゝ太刀を室へ納めまゐらす。郷人等は重太郎が。おのへ来まして額着て。今に
始めぬ事なれど。和子のお蔭で一郷の威さへ堕さぬ辱なさ。思ふに今日の馬盗
人もそのつかのまの。寿光の賊なるべし。この頃世間の噂に聞けば。阿闍梨太郎とかいふ
山賊の。この木曽山に寨を構えをちこちを徘徊るよし。勿論摩下も多くして中
にも一人当千の男士も雑りをるとのことかゝるまで大勢の頼ひあらんなれども和
子の膂力を辛ぢあらはせて遂逃しましば懲て再びこなたへは来ず彼狼狽もこそみゆる

一同に歓びあひこまごまと和みの賜あれば馬主の何某なるものその歓びに一献と
勧めさせたとやらのことまりの家さまの貴客も和やかと諸共に伺ひ侍せつゝよ
と荷助に申し會釈さまとべ重太郎に微笑てその辱く侍れども父と姉とがつ
ぞり待侍て在さるんに一刻も早く帰すうんその馬主へ伝言すう程よく宜
あるひと辞て去らんと云ひけるに郷人い尚許さじ倘も宿の乳母かゝるぞ
あるべ吾們ぞ乗りて其よりすべ去来と勧めさるゝ人の好意も黙止さまとぞ
さいとて西個い郷人を引誘ひまて馬主の方へいまとべ恭こゝろ。両個と亟ひ
屋で尚の労を厚く謝し折角招き来せても初せのあるくとの法まい歓ばべき
東西もるくその典さ漏るけまで法きまを製の酒もあり。さるんとの渓川ゆ釣
る年魚と黄頸魚鮎鯉孫蛇などもおゝい貯へいるまとべ調理させているうきこと
したゆへやとて折敷に盛せて持出た主ゞ仏の信実なるを両個いあく會釈

まて妻子の郷人も次の間より扱拵まて居流まを離まて庭へ進を敷連れこれ
ふも数多田坐て置こと置まり酒殽さうち食ひ辞ていますゝ高調子就る
夢をとうあげて小唄と謡ふのもあり。兎角ちるどふ黄昏て院ふい燈燭
灯し庭へ田坐の笑の中ゆい稿を焚て焼とん當下両個い主ふ謝ふ家外ゆ
歓待ふ酒を過ぎる刻限さいとう遅くなりぬ。ちゆ暇ゆうんとらの主人
い今宵ふ打の蕎麦進らせんと急ぎ爺の湯と俱ふ沸を厨温の混
雑ちや程もるく仕果るん。まづ且く待ふ休さまて不得ふ辞
ら雑けまとべ坐ふ腰まて在わどふ頃て蕎麦を持出て進むゝふ見まも
食ひ頃て人ふ暇を告てとち出まとべ去の夜の晴るゝふ山の端の月影作
げばちや交刻ふ程近うんと見とちゆめ喘て跳帰まとべ狐い孤燈ふさ
むひ物化ゝ孔る景勢るふ重太郎い衝と入まて唯今飯まゆ爺ふい何

方とのみを候ぶ遊び分を記るどそ彩遅うし待うるれば悪の夜もいと
長ふ思あぐとえ思あくまぬうまでさ多くと思へ過せばいとどあわ心煩のせられ
ぞとつまて重太いさぞあくんと猜ぶ如此とぞ止事を思ひ紀ぬ
まもと平生あいあくぬ。あん分が面持ひ思ぶ在せぞと問ぶ不遊
さんべくよ。簡不あん分が馬盗人と逐うひて出さる跡へ知縣りの走卒行ぶん
面談と逐さ紀要のあるれば早く来よりの赴あり今までかる例もあるければ。
あるとやと詰めど答へ御乳遣ぶとるるとひあきそ出るひぶ今不於て飯りこ多
いどそのの便宜も知ようあ。あん分が東く飯まるべ逐ひ不遣んと待ぶ飯らべ。
吏なふこそいと猶苦ぶてありけれと咲て重太も不特面今までの例の紀エて要
あくべ時もてべ紀あべ若ぶ。ふるると今まで飯アまさぬ。
何さ多仏綱のあり乳あり。かるるとあつらべ金井と伴ひ飯るべさふ途ゆ別れ

念ふさよ。彼人の知縣の莊ふちの明両三人ありと覚べ。簡様の節ハ便よ。表
どちそ遅ひと称ー注あべきと彼是。痒曉渓ひ日せんれ。さまとてる代
東ね。とふ後ぐきふもあくぶ。怖う人挑灯を生ぶ給知縣許ひて動静を
見んと。縞の裾を高く手そ。ん。とまとべ糸遅い。まづ兎ふ角ふその動静
を探てを歌めうう。太儀ぶ一走ア。若まさいとう向ぶるあ。走せ飯
時てをあよと言葉のまとのひ棚ある桃灯を把ろうて塵ちんく
火を駆を間を急ぐる。折ふ門道ふ人の足音重太ハ急ぎ戸を引明け。
近生ぶまとべ父ぶるあぞ。まづ秘ぶそ顔着ア。除アあん飯アの遅きとて。怖
う人業ぶ。ぶ今ぶも出遅ひふ来ん。ともア出る断とらべ高資を問
答ひ。彼方を結と窺ひ犯そ内へ這入とまを。ちあくを要とあくあく重
太郎ひ言いそべとを。ふつきそ容を伺ふ不高資いまづ糸遅ふ表の戸城

緊く縛さり。奥まりたる所へ曳き伏せ両人を拓させ入る。爲ふ和縣の拓さを
ふ。彼処へ列るふ廣間へ通し。待ちたること半晌許ぞて取次のうの出て。此方へ
寄り給へべ。家用の上ぞ帯剣すべ。在下暫く預らんとうかうそまぐ両刀を
その取次の漢士ふ渡す。案内さまて廣縁伝ひ。あけば和縣の白洲とあが
る。傍ふ十手目手寄武ひの拉搭ふんど蹲めり。懸運弥ふ砂利敷る落
間さ人廣らゆてうたとひだろ。この板縁ふ着坐させ。暫時あらて下司の
宮人大姉出来りつ。右右へ坐とトるる等一礼譯と変をうけて正面ふ隔紙
ひ一紀を立ふ和縣ふ。四隅ふ中央ふ坐。此方を伝と白眼てやきま
浪人西條九郎沈何等の遺恨ふ。家ふ紛ふひ倉めぞ害せんとう
さるぞ。分解ふ頓てきうせと肘怒らて詰りうふ此方ふ少の答えるけ
とぞ。ちのうとて答うふ和縣ふ頭を左右へ振。そまるの正一紀ふ恥ふ

一向存ぜぬ。明々地ふ頼ふべ。結ぐぞの法ぞ。夫
向人れて大音揚て滅さるとも争ふ者を有ぞ。只何処まぞも面ふ
るぞうふ張ぶ和縣大ふ笑ひ。伝も執念陳ぞ。そまと拓九郎証ふの
と渠ふ。そまとの下ふ九郎ふ傍ふ長櫓の蓋ふ。ひ一紀中ふ把ぞ幅具ふ
眼前へうち廣げ。爲ふ和縣山ふの赤の乳色を祝ぞ。ふ退ぞ将とうされんと
山へ列ぞふ暴ふ世東暗くう。何ぞのんと主の従者ふ続きぞ。
うちふ晴ぞ元の如く。まづ恙ふ祝ぞ折ぞの幅ふ獅矢一筋ぞ
不審けぞ相公の作ふ。ぞ焼倖ふて相公の渾身ふ傷ふ
まぞ。旗ふ尖さ腸操形ぞ。浮雲ぞ掌ふ冷けぞ振ぞ。
ふ黒漆ふて西條九郎高資と矢鏡ふ記ぞ。問ふ。
ぞ。ふ於ぞ人ぞ分機何方ふ廣ぞ探せふ。粉車太郎と。金井

こゝろみに和卿しが弓矢携えて遥の野邊に出ありけるが逐んとせしが相
公ハとゞめて止めたまひ這奴等ハ言に咲えたる凶児なりが放逐ならバこよなき珍なる
の出来んも知られバ僥倖にその身に恙なく。その矢の主も明らか地なり鏃へ飯て是その
静に法をもて正さんに如ずとありしと仰せなるまゝ其言に任して其弟の逐ぞやそこそ
目今汝を召されたりとまあとも分解ありや眼を定めて是を視よ彼是類据さ
りゆあんしと矢ハ幅にあゝさりまゝさゝあぢらうて白眼つゝ何也何にもうぶ名を記
さずる矢ハ幅にさそ著しく山中にありての怪異に遭し。知縣が山に在
ざれバ乞二筋の矢を放ち寸が慮らバ幅にうちしぬるは偶然る遁
ゆえ強你が料あしむや然るとの期に臨ぞ知らねどのうち陳ドがく何にも
紛重太郎山道遥に弟りしが白昼に常胤とあり扶を相公の山上に在す知
らバ虚空に対ひて二筋の矢を放うしなれ。その矢遁で召されたる幅へ中るし

なかんさ又ま紛重太郎が罪ハ万死に当ぬのゝみ名に恙なかりしとぞ自
他の幸慶ゆゑにありまゝでこのうへハ寛仁の御沙汰をもつて紛が過怠悴を褒
ならバ生でハ馬前の塵を拂ひ死してハ家運の護とありて永く恩澤を忘る
べからず元来つまつく何の意趣何の遺恨のゆゑ相公をバ窺ひぬべき悪まさ
くと思くも害心を懐きてあらぬ不るありバさて又百歩ハ隔つとも。それを射抜
ざる者にあらずとてあえて害心なき証を察しあへとのひさまぎバ杉九郎ハ声そうあげず。
やとま老耄頽さる敲きそ過とごふ久べよしや他人の首を斬ても過なり
とて済べきか。過も猝にこそよまし吾れに你がりよかく。渠が射藝百歩の外の。
下針とも射外さぬぞとて人も誉つまも粗。その術いよく知りぬ然るに相公
を射らして引絞たるその折にも皇天の誠を照させ給ふ人が忽地に暗となりつ。
覘着狙ひて矢ハ外ま相公の御身に恙なく你等が悪謀の見ありく不及び

知縣威を
逞くして
高資を陷
いれんとす

うつさく人富妻那の辨舌りて陳ずうとも安うう許え頻に白地ふ云ふそべ。汝の一個の糾ふ。武文ふ有ざるや。腹黒ふくもいひ迫め。逃まんとする比怯く繋く罪ふ伏さべ。まど吾们も孰成て廣大なる慈悲を作原術もあえん陳ずるべ猶陳ずるわど憎ま掛まて冥の損くつふや〜と勝うて直ー畳を敲きて詈まど勞所ざも覚えるとを何とやいそべさ。假令義回問うとも今ふ一つとの外ふ再ふ術もいべとの知縣ふ変振て所ふ汝が性名あまう重太郎ふいひ食めーうと禁せうくるあるべ。斯まで問ふ猶ー知ーずと陳ずうふ汝ー〜ぞ重太郎の不為なべ。さまべ汝通の書を徳めて渠を呼べ。倘貴ふぞの人数をきてむけ。捕捕て捌問せんれ。つふやめ何ふとふふよりは後でいひど。今渠を召傳て問とその在下ば若ふ問ばかるべ。渠ふ一已の巧をもて相ふと害せんとすうなべ。吾名の矢とて敲つべけま奚ぞ後の証ふとるべ。

害を徳めて放つとのいべさ爰とるめと奈ーるべ若年と吾们父ふの害ひるるぬと奈ーるべ若年と愚ーさ。粉ふとふいへど。箇程のとて慮ざる白痴ふそへいうべとのふ主従にを禁てまうふうもるべふ稽ーーるーーる再ふ考ー。鬼ても斯ても渠を曳ー捕問せべふ胸晴ぶ。親ーてふて縛紙ふ繋ぐとふ成さかん。組るのりの汝さ向べ。下ふ指るるず。とふ置くふ知ふ。不意ふ知縣の組ふ来べ汝河容ーるを東後。渠ふ曳れるべさ倘争ふて組ふ来ふ又ふふとふふ濡衣を着ぐよりるひるふもるべんと。ふ毛を止め。ふふ馬盗人のいとて。そをを逐近ふりしべいまべ彩あふ飯るます。第ふべまづ在下ふ脚を賜うるべ渠ふ飯るを待受て赤さ及ふ鎖へ長連まるらん。今狗九郎刀称の言をべく。不肖ふまべも武文の二枚の舌を凝ーて身成遁れんとするふのあまべ世義を絆ー揚うべ。とべ主従まさ雲時。物もいそべ

ありけるゞ良あつて狗九郎。さゝゞ足下を飯ア。佐と重太郎を将て来べ。彼れ罪
科の分明なるゝゝ。其行ゆゝ放ち難し。証文を認めよ。と硯料紙をこゝ出くまゝゞ。
そゝいと易きなりと頓て重太郎を召俱して。彼れ糸上いまゝゞ。倘このゝゝ
ゝゞ當国諏訪の大明神其外日本大小の神祇の罰を被べ。と認めさ
せゞゞ。と怒て紙墨いうち点ぜり。今宵遅ゝゞ翌ゝ已の刻を限ずと云て必
重太を伴ひ来よ。と文ようゝ遅ゝゝすとあゝゞ妙ぶ紙度ゝゞ。と那放ち遣
ゝまゝゞ文ようり両刀を受取て今ゝも飯を未まるゝ。ゝまゝ熟ゝ考ゝ測るゝ。猶退治
の折狗九郎が雑言ゝゝひ這面ゝゝひ。ゝる糸遊ゞ將縁を言ゝゝ遺恨ゝ
あり。今日既ゝ君を掠め。祇をゝそゝの鬱憤を晴さゝ欲ゝゝゝゝゝ
り是を笑ゞ憤ア。祇縣を雨ゞ。ゝ慮の災害ゝゝんとおもゝゝゝゝゝ
明日決を狗ゝめゞ。法のゝゝ両刀ゝゝゝゝゝ

吾ゝも辛を見えせん。と彼ゞ意中の計策ゝ遺ゝるゝゝゝゝゝゝゝ
文さゝ認めて翌已の刻と定めゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
兎ても用ても吾ゝゞ。進退ゝゝ谷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ智ゝ閑ゝる叔ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
紙ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
糸拉を伴ひて怪ゝう竜ゞ鼻渋峠の七里を紙を上野吾妻の郡ゝ。草津の
郷へ到ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ三寸不乱の右ゝすて。彼ゝる主従をゝゝ翌ゝ知縣へ紙
見金并ゝるへゝ見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゞゝち拒ゝ。絆の様を物語ゝ。義ゝ閑ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて振ゝゝん必滅ゝうやと指揮の動静。ゝゝゝの計策まゝ変を低め伺候

ふ。説示せば糸遊と重太郎いつも怒りて歯を切て且嘆歎せしと
いふなり。當下糸遊い小勝を進め。不束なる身を愛させるひ不正人の妻ゆい
せよと作ふ。ちふ因てあんみのうまと重太郎ゞ身のよふもとよりの兄大なる者の妻
ふけり。妾い女のことふて。在ふ甲斐なるものなりを恨令不良の人ふ嫁すともさま
ぞの苦患もあるべきなるべし。ゆまと苦患あるとても。この孤の幸不幸ゆて。むし
ろ賢女才女と。称るものも辛なるて。骸を溝瀆野徒ふ曝し。終ふを克せぬ
ものも多く。深川竹の流と不流と。況用胞を救ふもあり。こゝ是皆の親易ふよ
まべきなるこゝふ歎く筋ふも侍べまで。愚ふいこの身を郡縣へ移り。その縁を結びて多
び。郡縣も忽地怒解て。父子二個ふ事ねるべ。安らふ世を送らんゆ是ふ倍
ることあるべし。喃重太郎い行ふ。ふ善と。やゞ諸共ふ爹を勧めて此汁ふひ
給。といふを高資安もあるべ。改を左右くうち揮て。你ゞ何の殊勝なるふ

似ることどもいまこい一向義引ぞ九七活ふ。生ることあるを愛まるものやある。
その児の為ふ良縁と結び栄ゆく末ぞ。ふんとふいるべての人の情類。
さらまと智恵才覚ふも及びがたい貪婪ゆて。ゆ行とも術なるけまど義
と不善い是ふ異なりよりゆ陶朱公石崇ふ猶一倍せる富ありとも武ひい
蹟ゆ且郡吾ふ。まと光悪の心あるべ。ことを失ふ残の雪の日影まの
間ふ実るべぞ。まと孫晨ゞ粗薦ふ。夜寒を凌ぐ冬さも志しの高けれ
ば。挙て称讃するゞ如し。とふ知縣ゞ残毒无頼常ふ民の膏脂を絞て。
つゞ燈火を輝す。世ふいと稀なる酷吏ふて。苛政の人を傷ふと虎狼よ
ゝ。先哲脱ふいひ遺ふ。いで愛とる痩ふをりて虎狼ふ変ぬ。
公中い脱ふ決せり。无益の議論ふ時を移して。黎明ふ至べ便りろ。
頓と侵ゝを重太郎兼ゆ作ふ情るゆそいゆいなど。身ふも見えぬ清夜

きせて。吾こ父子ふ本あ〜せんとて。知縣ゞ計らひ悪けまど遇ふもせよ
父君の。名字を記せ〜箭を射るゝ。在下ふ知縣ゞ幅へされば
こゝ害心を含めるゝど言さて〜父君のゐ仏をこゝく悩まるゝ。
是已ゞ過るゝ。そを憎〜とも忍さまゞ。彼処へ行るゞ縲絏ふ遭ん姉うゝと
将て上野へ振けと作さるゝ。世ふ恐その重きことをゝゞ。
千顆万顆の珠ふも超え。その深さ色を論ずまゞ一入再入の紅ふも猶倍て
ぬゝ大恩を充ゝ知ゝ畏けまど在下夜中ふ立退と紅いよ〜害仏ある
ふ決〜。射損じて咎をうけ。詮方なさふ年老る。釈を幸て逃〜るんどく。
人の口の猛ふ懸るゝ。とまも生前の恥辱ゝ明朝知縣の莊へいら〜過と使害
仏ふいさゝゝ云ん。凛然ふまゞ向ひ做さゞ。知縣を始め列坐の奴
们驚ゝてゝとも死るん。とゝその身ふ死ゝとふとも名を穢ゝるゝふて。

あゝとこのとゝ件を蒙ゝて。ゝゝゝ高資莞示と笑こ妹が一云極めてよ。
さゝるゝ〜その二を知ゝて。その二をゞ知ゝざるゝ。常言ふも大功ふ細謹を顧ぜ大礼
ふ小譲を辞せゞとふいふゝ〜ずや今とそあまを渡ゝふ一方の大利とも做さゞゝと
ふふふより。日来大勇の旨を示〜粗仏ゆゝる辺るまど変ふ遭てゝらら忘れ
かるふ弟ふ拘ゝ〜ゝ。虎狼ふ斉一知縣ゞ〜ふふ命ゞも辛んとゝとゝ不得匹
夫匹婦の痴情ふ迫て溝瀆ふ縊るゝの類ひるゝべ〜他い何ともいそでゝ。
頻て大業をゝるふ知ゝゞ成るゝ者ゝ口を禁まん強いゝ〜ゞゝと説示せゞ。
重太郎い忽地暁て。ゝふも在下迫てゝ。ゞゝふ上いゝ計らひふ御坑さひ
ハド。とのゝゞ高資ゝち歓び。ゝの夜の刃子すゝ。ゝゝ寅刻ふも近ゝゝん。それ
糸遊も二枚の着替の衣を被ふ包ゝて背ふ捨〜つけ。山路るまゞ草鞋
ゝゝて足を痛めぬゝふせよ。ゝゝ指副るゝ。女るゝ〜も夜の旅不虞の

の准侍ふ弟てゆくべし。重太よ支度い整ひしう。この財布の裡ゆうい嫁て非常の備ふとて。狩へもさてる英金ゆり。其員多くいあゝざまど他邦へ出たての金詰より。他ふ特こいあゝぬのゆり。然つまと鬼石い伝実ゆて日本魂あるりのゆまび。彌踈異いあるべきゆゝねど。元来家族ふあゝざまこび首尾悉く厄介ふゆらんい護身影とあり。ときゆて性祝と出たを禀取。この内半と揚つゝん残を父君の腰ふ拴ゝて一刻も早く来ゆくう。霎時ざふもいと惜まるゝ。あれふゆれど左や右と。間ぞゝび悪うりゆん。いざこを出んとゝ糸遊を急ぎゝこれど糸遊い只管別まの惰まゝて。父ゞ傍とこうゆるを。高資暁ゝて刻ふ励ま。逐こるを做ゝけまび。詐方ゆるさふこをあゝ。眠こそ隠にのいゆべきゆをゆるもいそび注こい道を出ふけり

善知安方忠義傳第二輯巻之二終